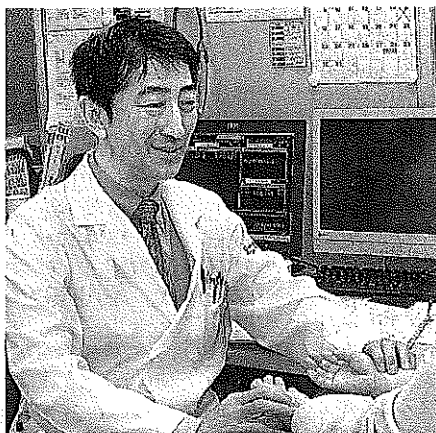


医師の目

近年、私たちの漢方医学センターに欧米を中心に海外から多くの留学生が訪れる。ドイツ・シャリテ大学、オーストリア・グラーツ大学、米国ジョンズホプキンス大学、ジェファーソン大学、テンプル大学などの医師や医学者が1〜3カ月滞在し、漢方を学ぶのだ。

わが国の医療は戦前はドイツ、戦後は米国の影響を色濃く受けて発展してきた。その欧米が、積極的に漢方を学ぼうとしているのである。

慶応大学医学部漢方部長 渡辺 賢治氏 ①



最近の調査によると、日本の医師の83・5%が日常診療に漢方を使っている。先端医療と伝統医療を融合した新しい医療が創出されようとしている。医療史上類をみない社会実験が進んでいるといっても過言ではない。

の副作用を軽減する漢方もある。こうした東西医療が融合した医療を今の日本は日常的に行っているのである。このような事例は世界を見渡してもどこにもない。各国の関係者の目が、「実験」の成果に注がれている。

例えば、大腸がんの内視鏡手術の後で、大建中湯という漢方薬を飲むことにより回復が早まり、入院期間を短縮できるといふ報告がある。また、抗がん剤治療

漢方を学ぶ西洋医学

わたなべ・けんじ 1984年慶応大医学部卒。慶大内科教室などを経て91年米スタンフォード大留学。北里研究所東洋医学総合研究所で漢方を学ぶ。2001年慶大漢方医学講座准教授を経て11年から現職。伝統医学を活用した日本型医療を提案、WHO伝統医学国際分類作成会議の共同議長も務める。

漢方は、文字通り古代中国国家「漢」に起源をもつが、多くの点で日本化した医学である。漢代の医学はある症状にある漢方が効果がある、という極めてシンプルなものだった。しかし、なぜ効くのかを追究するあまり、中国では理論が大きくなり過ぎて実践的でなくなってしまう。

一方、江戸時代に伊藤仁斎らの「古義学」に触発された医師らが、実学を重んじた医学として打ち立てたのが今日の日本の漢方の源流である。漢方は日本独自のもので、漢方という言葉自体、江戸時代に作られたわが国の造語で、中国で「漢方」と言っても通じない。英語の「KAMPOME DICINE」は日本の伝統医学を指す。

世界保健機関(WHO)は伝統医学の多様性を認めており、中国の中医学、韓国の伝統韓医学、日本の漢方は共通部分もあるが、異なる部分も多い。特に、中韓と違って医師免許が一つしかないわが国の医療制度の中で、漢方は非常に特異な存在といえるのである。

生活面「医療」の記事やコラムに関するご意見、情報をファクス(03・6256・2774)か電子メール(iryu@tokyo.nikkei.co.jp)でお寄せください。